

## 定例研究会要旨

日時：平成 23 (2011) 年 6 月 15 日 17:40～19:40

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「スィンディー語：どんな言語で、どこで、誰が使っているのか」

発表者：萬宮 健策（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授/ウルドゥー語学，  
スィンディー語学，社会言語学）

### 1. スィンディー語の使用地域

スィンディー語は、パキスタン南東部およびインドで話されている現代インド・アーリヤ諸語の 1 つである。母語話者は、推定 3000 万人程度とみられている。パキスタンの国語ウルドゥーやインドの連邦公用語ヒンディーとは姉妹関係にあるが、話者の多くが居住するパキスタンとインドを見ても、話者や言語を取り巻く環境は大きく異なっている。

パキスタン国内では、話者のほとんどが集中するスィンド州の公用語の 1 つと規定されており、出版活動も活発で、テレビ、ラジオなどメディアで耳にする機会も多い。一方のインドでは、憲法第 8 別表において重要言語の 1 つに数えられているものの、いわゆる「言語州」は形成しておらず、話者が集中して居住している州はない。首都デリーや商都ムンバイ、マハーラーシュトラ州のブネー、ウルハースナガルといった都市には多くの話者が集中していると言えるが、スィンディー語を第一言語として用いる環境はないと指摘できる。

なお、パキスタン国内ではアラビア文字（19 世紀半ばに採用された正書法）が用いられている一方、インドではデーヴァナーガリー文字も併用されるという、1 つの言語を 2 つの文字で表記するという点も興味深い。インド亜大陸では、バンジャービー語、それに見方によってはウルドゥー語とヒンディー語も同様の状況にあると指摘できよう。

### 2. スィンディー語の言語学的特徴

ここでは、音韻体系、能格構文、使役動詞をその特徴として挙げておきたい。

スィンディー語の音韻体系で特筆すべきは、4 種の入破音、5 種の鼻子音の存在、それに無声、有声の区別に加えて無気、有気の区別がある点である。特に 4 種の入破音、すなわち両唇入破音 [b]、反舌入破音 [ɖ]、硬口蓋入破音 [ʈ]、軟口蓋入破音 [ɟ] の存在は、近隣の現代インド・アーリヤ諸語を見ても、パキスタンのバンジャール州南部を中心に話されているサラエキー語等わずかの言語でしか認められない。

ほかの現代インド・アーリヤ諸語の多くと同様に、動詞の完了分詞を用いる文では能格構造となる。ウルドゥー語、ヒンディー語の *ne* に相当する能格を示す後置詞は用いられないが、意味上の主語は後置格形となる。これ以外では、喜怒哀楽を表す文に与格構造を採

る文型が多用されるのも、ヒンディー語、ウルドゥー語と共通点と指摘できる。

使役動詞についても、触れておきたい。ウルドゥー語やヒンディー語では二重使役動詞と呼ばれる仲介者を含む使役動詞が用いられている。スィンディー語にも同様の動詞があるが、スィンディー語における使役動詞の特徴として、多重使役動詞の存在が挙げられる。

たとえば、

mū: ma:ni: k<sup>h</sup>a:d<sup>h</sup>i: (私は食事を食べた)

mū: A k<sup>h</sup>e: ma:ni: k<sup>h</sup>a:ra:i: (私は、Aに(直接)食事を食べさせた)

mū: A k<sup>h</sup>e: B k<sup>h</sup>ā: ma:ni: k<sup>h</sup>a:ra:ra:i: (私は、Bをして、Aに食事を食べさせた)<sup>1</sup>

mū: A k<sup>h</sup>e: B k<sup>h</sup>ā: C je: wa:ste: ma:ni: k<sup>h</sup>a:ra:ra:ra:i: (私は、Cをとおして、BをしてAに食事を食べさせた)<sup>2</sup>

動詞の構造上、多重使役動詞が、要素/ra:/を繰り返すことにより導き出せるという点は、特徴の1つと位置づけられよう。

### 3. 社会言語学的側面

パキスタンやインドは、言うまでもなく多民族多言語国家である。このような社会では、異なる民族間でのコミュニケーションを図るための共通語が必要とされる。パキスタンではウルドゥー語および英語が、インドでは主としてヒンディー語と英語がその役割を果たしている。今回扱ったスィンディー語は、「地方語(regional languages)」と位置づけられ、通用地域は限定される。パキスタンにおいては、スィンド州が主たる通用地域となるが、自らの言語や文化に強い誇りを持つスィンディー民族は、自身の権利を擁護するという観点から、ウルドゥー語を唯一の国語と規定することに抵抗した。1970年代前半を中心とする時期には言語紛争(linguistic conflict)と呼ばれる事件も起きた。その結果、スィンド州のみが州公用語としてウルドゥー語とスィンディー語をともに規定することとなった。

インドでは、前述のとおり言語州を形成していないため、使用範囲が限られる。事実上家庭内言語という位置づけである。こうした状況下では、一部の地域を除いて若年層の学習意欲も高くないが、言語の保存活動は活発である。

---

<sup>1</sup> Aに食事を食べさせたのはB。「私」の役割は、Bに対し、Aに食事を食べさせるよう伝えること。

<sup>2</sup> Aに食事を食べさせたのはB。Cの役割は、Bに対してAに食事をさせるように、という「私」の意向をBに対して伝えること。